

自主臨床研究

栄養発育研究グループ

小児の性腺機能予測因子としての血中 抗ミュラー管ホルモン測定の意味

実施期間	2020年12月31日まで
研究機関	大阪大学医学部附属病院小児科
主任研究者	大藺恵一（教授）
研究目的	抗ミュラー管ホルモン(anti-Müllerian hormone：AMH)は、精巣および卵巣から分泌されるが、小児における測定意義はまだ十分に確立されていない。近年生殖補助技術の進歩に伴い、不妊治療は著しい妊娠率の上昇をもたらしているが、発育途上にある小児においては、性腺（精巣・卵巣）機能の評価が困難である。本研究は、小児において血中AMHを測定し、性腺機能を予測することを目的とする。
方法	性腺機能低下症が予測される患者様について、診療録の調査と、通常検査とあわせて抗ミュラー管ホルモンの採血を行います。
意義	評価のむづかしい小児期において、抗ミュラー管ホルモンを用いることで性腺機能を把握することができます。
対象	①性腺機能低下が予測される小児、または小児期からフォロー継続中の成人患者 ②年齢：40歳未満 ③性別：問わない ④本人または代諾者（法定代理人（親権者、未成年後見人）または成年後見人）から同意が得られた患者

プライバシーの保護

本研究は大阪大学医学部附属病院小児科において抗ミューラー管ホルモンを測定された患者さんを研究対象とします。プライバシー確保のため、患者さんが特定できないようにデータを処理した上で研究解析を行います。また、研究結果を公表する際には、患者さん個人が特定されることはありません。

お問い合わせ先

大阪大学大学院医学系研究科 小児科学
三善陽子（講師）